

瀬部小だより 3月号

平成19年3月2日



1 あいさつで心もなごむ瀬部小の子

月日のたつのは早いものです。早18年度も残り少なくなってきました。春の日差しも一段と強くなってまいりました。桜の蕾もいくぶん大きくなってきたように感じます。今年は暖冬の影響で、厳しい冷え込みはあまりありませんでした。

3月は次の学年に向けて、学力補充の月です。各学年で対策を練って、今実施中です。

さて、あいさつができない子とできる子がいます。登下校指導をしてくださるSBMBの方から、あいさつを返してくれるので、気持ちがいいとおっしゃる方と、あいさつをしても返してくれないと嘆いてみえる方もいます。



職員の中でも、あいさつ運動に取り組んでも、なかなかあいさつができないとの声が上がっています。あいさつは、コミュニケーションの第一歩だとよく言われています。しかし、しようとする気がない限りできません。あいさつが十分にできる環境作りに配慮していかなければならないと思います。コミュニケーションを意識できるのは大人ですから、声をかけ続けていくことが大切かなと思います。「家

庭であいさつをしあうこと。夫婦間でもしていくことが大切」(2月5日の「今・ここ家庭教育講座」での高橋先生の話より)だと言われています。大人の間でまずあいさつの励行をしていくこと。そして、あいさつができるまで、学校と保護者と地域との協力で瀬部の子どもたちを育てて行きたいと思えます。校門で、あいさつをしていますが、あいさつを返さない子もいます。しかし、できるようになるまで、こちらから進んで「おはようございます」とあいさつをかけています。時間はかかりましたが、何とかあいさつが返ってくるようになりました。100メートル以上はなれたところから、「おはようございます。」とあいさつをする子もふえてきました。「3年間立っていてよかったな。あいさつを続けてよ

かったな。」と思います。あいさつが自然にできる子どもが増えるよう、声をかけ続けていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

2 子供をよくするには・・・

「叱らぬ教育の実践」(霜田静志 著 黎明書房版)に感動した言葉がありましたので紹介いたします。子供は叱ったりほめたりしながら伸ばしていくと言うのが常識的な子育てのように思われます。しかし、著者は、つぎのように述べます。

「子供をよくするには、なんととっても愛が必要である。

そして、愛とは、単なる『好き』とか『可愛い』とかいうようなことではない。それ以上に、子供を認めてやり、子供を賞賛してやることである。むやみに欠点をひろいあげて、いけないいけないと言っていると、本当にいけない子になってしまう。子供の性の善なることを認め、必ずよくなることを信じて、これを導くとき、初めて子供はよくな



っていくのである。欠点を数え上げて、これを責めるのは憎悪の心である。それは子供をよくする力とはならない。欠点を^{ゆる}赦し、理解と愛を持って導き、賞賛と激励を与える時、子どもは必ずよくなってゆくのである。」さらに、「ほめると調子にのり、いい気になってしまって困るという人がある。だがそれは、ほめたのではなくて、おだてた場合である。できもしない子をできるできるといってほめるのはおだてである。本当によくやった行いを、よくしたといっって認めてやるのは真にほめることである。よいことをほめて、それが悪かろう道理はない。」そして、「愛の叱責、賞賛の叱責はよい。しかしまちがっても憎悪の叱責、^{ばげん}罵言の叱責はなすべきものではない」と結論します。子供を信じて待つ大人の心構えが、もっとも大切のように思えます。

3 1年間ありがとうございました。

平成18年度も年度末を迎えました。子供たちは、学習を始め生活においても、まとめの時期を迎えています。

来年度も、子どもを育てるパートナーとしてよろしくお願いいたします。1年間のご愛読ありがとうございました。